
幻夢抄録 覚醒め

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 覚醒め

【Zコード】

N1188A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

早瀬氷魚彼女は、どこにもいる、じく普通の高校生。氷魚は、連日の悪夢に悩まされていて、夢の中での言葉『迎えに行くからね』が気になっていた。そして、その言葉が遂に現実に！？氷魚は、『迎えにきた』と言つて、突然現れた瑪瑙めのうと名乗る少年に連れられて、異空間への門を潜つてしまつ。砂漠を越え、広野を渡り…。自分の生きる意味とは？なぜ生きているのか？生きるべき場所を目指して、二人の旅は続く。

幻夢抄（おとぎしよ）

「んにちわ、維月十夜です。

『幻夢抄錄 覚醒め』更新致しました!とをお知らせ致します。
氷魚の前に現れた瑪瑙という少年、彼は一体…?
まあ、『ゆるりとお楽しみくださいませ

闇、だつた。

その闇の中、高く虚ろに、水音にもよく似た音が響く。

彼女は、哀願していた。

(オネガイ、アタシヲヨバナイデ…アナタハ、ダレ?アタシヲヨバ
ナイデ、メザメナンテ、ノゾンテナイノー!)

樹々を伝つ、赤い雨。

『あれは、なあに?』

『迎えに、行くからね』

おかしな夢を見た。

凍えそうなくらいに寒く、真っ白で。

もしかしたら、雪だつたのかもしれない。

凍える寒さの中で、あたしは、血にまみれて泣いていた。

『田覚めるのは、イヤだ』と。

それは、妙に生々しく、はつきりと明瞭に思いだすことができた。
(なん、だつたんだるう?)

その、妙な夢の余韻が抜けず、ベッドに座つたまま、ぼーっと呆けていた彼女を、母親の怒号が殴つた。

「ちょっと、なにボケッとしてるの!学校、遅刻するわよ!」

「ああ、はあい! いま下行くから!」

ベッドから立ち上がつたその時、枕元に置いてあつた、田覚まし時計が落下する。

アラームが、穏やかな朝の静寂を切り裂いた。

「あ~つもう、うるさいなあ…どうして今ごろ鳴るんだか

制服に着替え、着替えの為に閉めてあつた、うす藍色のカーテンを開ける。

雲一つなく晴れた空が、目に眩しかつた。

「うーん、今日も快晴なり。いいことありそう

アルミサッシの窓を開けると、初夏の朝風が舞いこみ、彼女の制服の、若草色のスカートを、ひとしきりに揺らした。

「今、夏…だよね？あの夢、なんだったんだろう？」

彼女は、ぽつりと呟いた。

ここ最近になつて、同じ夢を何度も見るようになつた。

なにか、原因になりそうな物を、いくつか思い浮かべてみる。

思い浮かべてみると…結局、いくらかしなこうとに、彼女は考えるのをやめた。

面倒くさくなつたのだ。

「ま、いつか。それより朝ご飯たべよ」と

彼女はギシギシと、古びた階段を軋ませながら、暢気にも鼻歌を歌いながら下りていった。

「おっはよう」

台所の暖簾をくぐり、彼女は椅子に座った。
座ると同時に、コトリとテーブルが鳴り、皿の前にトーストとベーコンヒツグが出された。

「ほら、早く食べなさい。遅れるわよ？」

皿を置いた彼女から、機嫌の悪い、ピリピリとしたものが伝わってくる。

それは、別に自分に対して腹を立てているのではない。

朝の母は、機嫌が悪いのだ。

それが、今に始まつたことではないのが分かっているので、別段、気に留めたりはしない。

「分かってるよお、いただきまーす」

言われた彼女は、とばっちりは御免じよめん、とばかりに肩をすくめてから笑つた。

「氷魚あなた、最近顔色が悪いようだけじ、ちゃんと寝てるの？」

しかし彼女は、質問には答えず。

トーストを銜くわえたまま、せわしなく廊下を右往左往していた。

「結婚をやめ、そんなの話しあるやないんだってー。」

毎朝の光景に、彼女の母親は、先が思いやられる、と溜息をついた。

「忘れ物は、お弁当持つた？」

「ないないっ、いつでもまーす！」

玄関のドアが、勢いよく閉まる音を遠くに聞きながら、氷魚は走り出した。

氷魚は元気だけ取り柄のところでもいる。ごく普通の高校生だ。

いま彼女は、絶体絶命の2つの危機に瀕していた。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「どうせ今、ヤバいよーんだ」

氷魚は、一度田の子鈴を遠くに聞いて、言葉通りに飛びはねた。

校内に、予鈴が軽やかに木靈する。

氷魚は、息も縋る縋るに机に突き付けていた

一七

「ひーちゃんてば、今日は自習つて言つてたでしょー? 聞いてた?
死にかけている氷魚を、後ろの席の、クラス一のトラブルメーカー
で、小学校からの幼馴染みでもある小松千早ちはやが、寄ってきてからか
つた。

「たぶん、寝てたわ……」と氷魚。

「うん、分かる… 担任の授業つて、眠くなるよねえ」

なるなる「

老年の彼の授業は、テンポが遅い。

なので昼食後の授業は勿論、朝一でも、どうしても眠くなってしまふのだった。

氷魚は、欠伸をかみ殺しきれずに、大あくびをしてしまった。

「なした、寝不足？」

彼女、千早が聞いた。

しゃがんで田線をあわせ、首を傾げている。

「そうなんだ、ここ最近、へんなの」

「へんて、悩みごと？親とか？」

「つづん、夢を見るの」

「夢、どんな？」

「言つても、笑わない？」

「笑わない笑わない」

「ホントかなあ」

「ホントだつて…話してよ、気になるじゃない

「うん、なんかね…夢の中で、なぜかまわりが真っ白で、寒くて。もしかしたら雪だったのかも知れないと、あたし…いつも血まみれで泣いてるんだ？」

「うーん、血まみれか…疲れてるんだよ、きっと。休めばよくなるさ、元気だしなよ」

「そ、そうだよね？サンキュー」

そつ言つと、氷魚はもう一度欠伸をして、机に突つ伏してしまった。

「ほつや、相当ひどいね…可哀相だし、ほつといつひとつ」

初夏の、生温い風が、氷魚の髪をそつと撫でた。
くすぐったさに目を覚ました彼女は、一、二回瞬きする。
放課後の教室には、静寂が満ちていた。

「あれ、あたし…寝てた？もう、それにしても、起にしてくればいいのにさ。仕方ないなあ、一人で帰るか廊下を歩きながら、他の教室も覗いてみる。しかし誰もいないのは、どこも同じだった。

(ホントに、誰もいない。おかしいなあ…そんなに、遅い時間でもないのにねえ)

氷魚は、靴箱を閉めると、外へ歩き出した。

(やつぱりヘンだ、なにかが可笑しい)

いつもは、学校帰りの学生で賑やかな商店街。

しかし今は、まるで死に絶えたかのように静まりかえっている。

氷魚は、大通りに出ると、携帯で自宅に電話をかけた。

無機質な呼び出し音が響く。

一回。

二回。

三回。

氷魚の背中を一筋、嫌な汗が伝った。

どうしたんだろうか。

なぜ、出ない？

もしかしたら、何かあつたのか？

「どうしたんだろう……」

携帯を閉じる氷魚。

通り抜けていく風の音が、いやに、大きく聞こえた。

とりあえず、なにがあつたのか確かめなければ。

氷魚は走り出した。

橋を渡り、砂利道を走り抜け…。

しかし、そこにあるはずの自宅はなく、茶色い土を剥き出しにした、
ただ広い敷地が広がっていた。

「うそ、なんで…なんでウチがないの！？一体、なにが」

背中に強い衝撃を感じて、氷魚は、きつく眉根をよせた。

「石…じゃなかつた、なに、祠？なんでウチの敷地にこんなのがあるんだろ？」

その時、どこからともなく、男の笑い声がする。

もう、可笑しくて、仕方がないと言つたふうの声だ。

「ねえ、誰かいるの？！」

氷魚は、せわしなく周囲を見まわす。

しかし、くつくつと笑い声は止まない。

「ねえってば！」

血が上つて、怒鳴り散らした彼女に、やつと氣づいたよつて男の声が応えた。

「あ、ああ…すまない。氣を悪くしないでくれ」

「どこにいるの…？」

きょろきょろ、と見まわす氷魚。

しかし、なかなかそれらしい姿は見つからない。

「すぐ側にいるぞ？ 氷魚、お前の足元にね」

「え…黒猫、どこから…」

黒猫は、氷魚を見あげて一声鳴くと、笑い始めた。

「迎えにきたよ、氷魚。ああ可笑しい、お前の、あの時の顔と來たら、腹がよじれるかと思った」

「ね、ね、猫が喋ったあ…？」

あり得ないものを見た人間がする、お決まりの行動。

氷魚は、後ずさつた。

「およ、やつぱりこの姿はマズかつたか…これが気にくわんなら、何にでもなるぜ？」

猫は、祠に飛び上ると、黒いノースリーブに、ジーンズを着た男に変わっていた。

「あ、あんた、一体…？」

おそるおそる、男の方に近づく氷魚。

「お前を迎えてきた、それはさつを言つたな？」

いきなりペースが崩れ氷魚は、ぱけくりと瞠目した。

「いや、そうじゃなくて」

「ああ、自己紹介してないのか。俺は、瑪瑙めのうつていう。よろしく勝手に話を進める彼に呆れつつも、氷魚は、とりあえず状況整理をすることにしたのだった。

「あ、あたしを迎えて、どうこうこと？」

(なんのよ、コイツ…いきなりペースがずれたし)

「なにも覚えてない、か。まあ、仕方ないよな、小さかったし

「え？」

氷魚は、内心頭を抱えた。

目の前にいるこの男は、初対面の筈の、あたしを知っているというのだ。

(ますます分かんないつ、なんなのよ「イツはあ！？」)

「え～っと、つまりだな…アンタは、人間として育つてきただが、それが全部嘘だつて事さ」

「は？なに、なに言つてンのか、さっぱりわけ分かんないんだけど？」

「だーから、お前は人じやねえつてことだよ」

ばちゃん、とウインクを飛ばしてきた彼

瑪瑙に、氷魚は、

サークと全身の血の気がひいた気がした。

瑪瑙（前書き）

突如、目の前に現れた少年・瑪瑙。氷魚は彼に『お前は人間じゃない』と言われてしまう。戸惑う氷魚は…

「お前は人じやねえ。俺と同じ、魔属だよ。つたく、魂だけで出てきて、そんなに急ぐ必要がどこにあつたんだ？」

片眉を上げて、困った顔をしてみせる瑪瑙。

一方、氷魚はパニックのあまり、眩暈を起こしていた。
「だつ、だつて、どこ行つても、誰もいなくて、しかも、ウチはなくなつててつ」

「とにかくだ、今は、早く体に戻んな。夜、また迎えに行くからよ」氷魚は、今にも倒れてしまいそうだった。

あまりに早い展開に、頭がついていかないのだ。

「いや、まだ分かんないんだけど……ねえ、戻るつて、どうやるの？」

氷魚はまた、背筋が寒くなる思いをした。

「強く念じればいい、やれやれ……じゃ、後でな」

「あ、ちょっと待つ……」

その時、彼が消えたのか、あたしが消えたのか、分からなかつた。

「……お、氷魚！？ちょっと、あなたどうしたの！？しつかりして
ちゅうだいつ」「ん……」

氷魚は、搔きぶられて目を開く。

ぐるりとまわりを見まわすと、自分は、自宅の玄関前に横たわっているようだつた。

どうやら、無事体に戻れたらしい。

「さつき学校から電話があつて、あなた、無断で早退したつて言つ
じやない。どうしたのつ？」

母の金切り声が、頭に響く。

氷魚は、ふるふると頭を振つた。

「さつき？ね、お母さん、今何時？」

「こま？今は、12時半ちょっと過ぎただけで？」

「12時、半っつも、どうなつてんの？あたし、さつきで学校にいたのに…もう、一体なにがどうなつてるのー？」

氷魚、苦惱中。

少し躊躇こぎみに、彼女は氷魚に声をかける。

「なあに、へんな子ねえ。お腹、まだなんでしょ？作るから早く中に入りなさいよ」

「う、うん」

玄関に入つていへ母の背中を見送ると、氷魚は、石青の空を見あげて呟いた。

「あれも、夢だったのかな？」

風が、語尾をかき消す。

氷魚は、ぐるりと踵を返すと、玄関に消えていった。

旅立ちの時（1）（前書き）

再び、氷魚の前に現れた瑪瑙。
『お前は、今夜死ぬ』と。

彼は急に、こんな事を氷魚に言った。
彼女の運命、
いかに！？

旅立ちの時（一）

「氷魚、お毎できたわよ？」

彼女は、居間に氷魚の姿がないのに気がつき、廊下に出了た。
一步、階段に足をかけて、氷魚を呼ぶ。
しかし、返事は返つてこなかつた。

「氷魚、氷魚…」

うす闇の中、中音の男の声が響く。

漂つっていた彼女の意識は、ゆるゆると浮上を始めた。

「ん、誰…？あたしを呼ぶのは」

氷魚は、『じし』と眠い目を擦り、顔をあげた。

「やーっと起きたかよ、俺だよ、俺！」

ぐるりと視界を巡らせるとい、瑪瑙が机に座つていた。

「あー、さつきの猫ちゃんじゃない」

「瑪瑙だつ、記憶力ないのか！」

欠伸をして、ついつむ瑪瑙をシカトする氷魚。

「で、なんなのよ。例の【お迎え】？」

「話を逸らすんじゃねえ、それもあるが、教えてやりに来たんだよ
シカトをされて面白くなかったのか、瑪瑙は、憮然として言つた。

「何を？」

氷魚は、訝しげに眉をひそめた。

相変わらず、この男は言葉が足りない。

「お前…今夜死ぬぜ。だから、思い残しがあるなら、早いウチに済ませとけよ」

一瞬、思考が止まつた。

心臓が、止まるかと思つた。

急に、なにを言いだすのだこの男は！
「ち、ちょっと…死ぬってなに…？何なのよつて言うかアンタ、

ひとつ言もそんな話、しなかつたじゃない！いきなり現れて、そんなこと言つんじやないよ！」

氷魚は、瑪瑙の襟首を、ガクガクと引っ張りあげて怒鳴った。

「まつ、待て！ヒトの話は、最後までちゃんと聞けって…続きを読むんだよ」

締めあげられた瑪瑙が、じたばたと暴れる。

彼としても何とかして、この状況から抜け出さなければならないからだつた。

「え？」

氷魚は、動きを止める。

「ふは…死ぬかと思つたぜえ」

瑪瑙は、襟元を直しながら、話し始めた。

「別に、生命自体が消えるわけじやない、言い方が悪かつたよな、ごめん…被つていた人の皮が破れて、孵化をする、これは覚醒めなんだ」

「覚醒め？」

きょとん、と首を傾げる氷魚。

「ああ。まだ時間もあるし、挨拶ぐらいしてこよ。もひ、会えなくなつちまうぞ？」

「あ…えなくなる？」

「そうだ、人として生きた記憶は、そのまま残る。相手も、お前を忘れない。だけどな、俺たち魔属つていうのは、人の目には見えないんだ。例え、目の前にいてもだ、姿も見えずに、声も届かない」

「そんな、どうして！？」

勢いよく振り仰ぐ氷魚に、彼は、どこか辛そうに微笑んだ。

「それが、決まりだからだ」

握りしめる氷魚の掌に、きつく爪が食い込む。

「ねえ、あと…時間、どれくらい？」

俯いたまま、氷魚はぽつりと呟いた。

「日没…陽が沈んすぐに、変化はくる。行くんだな？だつたら母

親に言つておけ、暗くなつたら、絶対外に出るな、と。いこな？

「分かつた…」

ゆつくりと、木目地のドアが閉まる。

氷魚が部屋を出て行つてから、瑪瑙は悲しげに、一つ息をついたの

だつた。

「可哀相だが、仕方ないんだ…」

階段を下り、廊下を抜けて。

氷魚は居間に入つた。

「ねえ、お母さん」

氷魚は、いそいそと、台所を片付けている母の背中に話しかけた。

「ああ、氷魚？ お皿なら冷蔵庫の中よ？」

「うん、ありがと。ねえお母さん、あたしがいて、よかつたつて思つたこと、ある？」

「もう、どうしたの？ あるに決まつてるじゃない。へんな子ねえ…」

彼女は、怪訝そうに眉を寄せた。

「つうん、なんでもない。ありがと、お母さん」

氷魚は、泣きそうになるのを、笑つて誤魔化した。

「氷魚、あなた最近可笑しいわ？ もしかして、どこか悪いの？」

母親は、心配そうに、氷魚を見あげていつた。

「なんでもないの、ただ、聞いてみただけ」

「そう、ならいいけど…」

「お母さん、今日は、もう外には出ないでね？ 危険だから」

「氷魚？」

「絶対だよ？」

「え、ええ」

なぜか強く念をおす氷魚に、母親は、なにが何だか分からぬ、といつ顔をしながらも頷いた。

「元気でね、お母さん…バイバイ」

すれ違ひざま。

氷魚は、そつと呟いた。

「ちよつ、ちよつと氷魚…なんなの？一体」

氷魚の、部屋のドアが閉まる。

「あ、氷魚」

戻ってきた氷魚に、話しかけようとした瑪瑙は、びくりと動きを止めた。

彼女は、泣いていた。

溢れる涙を拭いもせず、声を殺して、泣いていた。

「もう、全部渡した…あたしは、独りぼっちだ」「むせび泣く彼女を慰めるように、瑪瑙は、ポンポンと軽く背中を叩いてやつた。

「陽が沈む。時間だ…氷魚」

「どうなるの？あたし」

開け放しの窓から入った風が、カーテンを大きく揺らす。

氷魚は風を纏まとい、青白く光り始めた。

「きれい…不思議ね」

風を纏いながら、流れるように、彼女の容姿は変化していく。黒く、艶やかな髪から、燃えるような、赤みを帯びた銀髪へと。

「氷魚、お前に、言っておかないとならん事があるんだ」「じつと、変化を見守っていた瑪瑙は、ひどく言ござうに、口を開いた。

「なんなの？」

ぱちり、と瞬いた彼女の瞳は、深い青色に変色していた。

「俺は、親友に、お前を捜して守るよう頼まれた…」

「親友、て…その人が、なぜあたしを捜しているの？その人は、今どこに？」

瑪瑙は、気取られぬよう、きつく唇を噛んだ。

云うことを、躊躇したのだ。

伝えるべきか、否か。

まだ目覚めたばかりの彼女に、【この事】を伝えるのは酷だ。
分かつている。

けれど、伝えなければ、彼女を向こうに連れて行くことはできない
のだ。

「ここに、いつの世界にくる4日前に…死んだんだ。そいつは、

氷魚、お前の兄だよ」

瑪瑙の予想どおり、氷魚は驚いた。

なにしろ、片割れの死を、告げられたのだから。
けれど、伝えたこっちも辛いのだ。

こんな事を思つてしまふ自分が、なんとも憎たらしい。

暫くうちに拉がれていた氷魚が、やつと、搾りだすよう言つた。

「あたしに、兄がいた？！死んだって言つたわね、なにがあったの
？話して、お願ひ

「いいのか？ホントに、聞きたいか」

初めて、距離を置くように言つた瑪瑙に、氷魚は真っ直ぐな、澄ん
だ眼差しを向けた。

「いいの、話して

彼女の目には、一点の曇りも、見受けられなかつた。

真つ直ぐな瞳に促されて、瑪瑙は、その重い口を開いた。

「…あれは

彼は、ぽつりぽつりと語り始めた。

4日前の、あの惨劇を

旅立ちの時（2）（前書き）

氷魚の前に突然現れた瑪瑙は、今は亡き親友・柘榴に頼まれて、氷魚を迎えたのだと話す。〈br〉一人の、危険（？）な旅が幕を開ける！〈br〉異界が舞台の、壮大スペクタクル

旅立ちの時（2）

「…あれは、今から丁度4日前のことだつた『向ひ』の世界で、瑪瑙は、私用で村の外へ出ることになつていた。

「すまん、人手の足らないこんな時に出ることになつちまつて…。母ちゃんが倒れたらしいんだよ、まったく仕方ねえつたらねえぜ」崩れた家屋の残骸に腰掛けながら、瑪瑙は苦笑していた。

ついこの間。

まだ一週間も経つてはいないだろう 他の、天敵魔属から奇襲を受けたばかりで、村は悲惨な有様だつた。

「行つてこいや、そっちの方がよっぽど大事だ。村は平氣さ、隣村にも人手を頼んでみるから」

そう言つて、一見、少女の様にも見える親友・柘榴^{かくろ}は、につこりと笑つてみせた。

「柘榴…」

瑪瑙はうつむいた。

人手を頼むと言つても、どこの村も、今の状況が苦しいのは変わらないはずなのに。

自分は、無理な頼みをしているのだ。

「そんな顔しない…俺にとつても、お前の母さんは家族みたいなものなんだ。行つてこいや」

「ホントにいいのか？じゃあ…」

彼の厚意をありがたく思つた半面、後ろめたくも思いながら、瑪瑙は村を出ることにした。

たかが4日、そう思つて。

「悪いな、柘榴…4日で戻るから村の方、頑張れよ？」

「分かつてゐるさ、それと…瑪瑙、頼みがあるんだ」

瑪瑙は、首を傾げた。

柘榴が、自分も含めて、他に頼み事をするのは滅多にないからだ。いつも、自分も気づかぬウチに、手早く済ませてしまつ。

「頼みつて、随分珍しいじやねえか、なんだよ?」

「ヒトを、探してゐるんだ…手伝つてくれないか?」

「ヒトねえ…好きな女でもできたのかよ?」

彼に想われる女性とは、一体どんな女性なのか、と瑪瑙は内心毒づきながらも、親友の、珍しい頼みを聞いてやることにした。しかし、それがどうやら顔に出ていたようで、柘榴は、苦い笑いを浮かべていた。

「おーおい、眉間にシワ寄つてる、シワ!」

「あ、悪い…」

「そんなんじゃないよ、大切な女性には、変わりないけどね」

「ふーん…で、その手がかりとかはあるのか?」

面白くなさそうに、口を尖らせる彼に、柘榴はくすくすと笑つた。

「そうだつた、手がかりと言つても、こんな物しかなくて」

瑪瑙の視界いっぱいに、朱金色の金属でできた、ペンダントが飛び込んできた。

ペンダントを受け取つた瑪瑙は、球形のそれが、真ん中から一つを開くようになつていて、氣づく。

「お、なんか入つてる…髪、みてえだが?」

一つに開いたペンダントの中には、持ち主と同じ、鮮やかな赤毛が入つていた。

「うん、その髪が発する氣を辿つてくれ。その先に、きっと彼女はいる」

「ああ、どんな女だらうが…」の俺が絶対、連れて帰つてみせる。期待してろよ?」

ペンダントの中身
で、瑪瑙は手を振つた。

「済まないな、氣をつけて行つてくれ」

「おうひ

瑪瑙は、鷹揚に微笑む柘榴に見送られて、意氣揚々と村を出て行つた。

しかし、それが

元気な柘榴を見た最後だつた。

彼が村を出た翌日、辺境の小さな村が、炎を上げた。

それから丁度、4日が過ぎた。

私用は済ませたが、なぜか柘榴の妹の情報は見つからず、手持ちぶさたで村に戻った瑪瑙は、変わり果てた村の光景に、ただ、茫然と立ち尽くすしかできなかつた。

折りかさなる、焦げた死体の山。

崩され、焼き払われた家屋。

依然として燃えさかる業火が、白い灰をまき散らしている。爆ぜて、目の前に倒れてきた材木を、瑪瑙は慌てて除けた。やはり、自分は村を出てはいけなかつたのだ。

分かつていたクセに、なんて愚かなことを…！

瑪瑙は、ゆっくりと走り出した。

自分は、柘榴を探さなければいけない！

硝煙の中を、半狂乱で走りまわつていた瑪瑙は、障害物につまずき、地面に背中を、いやと言うほどに強打してむせ込んだ。

「げほっ！、げほ…ついてえ」

硝煙が、うつすらと晴れしていく。

瑪瑙は、全身の血液が、凍つた気がした。

そこに倒れていたのは、背中に死傷を負つた少年。

傷ついてもなお整つた、見なれた顔。

柘榴だつた。

「柘榴！？おい、しつかりしろ、なにがあつたつ」

そつと柘榴を抱え起こした瑪瑙は、ぴくりともしなかつた親友が、薄く目を開けたので、少なからず安堵した。

あるいは、まだ助かるかも知れない、と。

「よかつた…戻ってきて、くれたんだね…。もう、会…えないか

と。君を、待っていた…

言つと柘榴は、必死に、震える腕を伸ばしてきた。

その手には、あの、球形のペンダントが握られている。

「め、のう…これをつ、奴らは、ずっと狙つていた！」

叫ぶように言つて、柘榴は、むせ込むと同時に血を吐いた。

「やめろっ、これ以上喋つたら、傷が広がつちまうっ」

「それでも、いい…言わせてくれ、頼む、頼む…っ…」

異様なほどに、田をきらつかせる彼に強く腕を握られて、瑪瑙は折れるしかなかつた。

「ぞ、柘榴…」

「俺が、探してたのは…妹なんだ。まだ…幼かつたあいつを、俺が、下界に落とした。殺されるよりは、と思つて」

「なにつ…？」

瑪瑙は、耳を疑つた。

下界 そこは、殺伐とした砂漠の向こう、地の果てにある世界だからだ。

「人間の…世界にいる。追わ…れることになる。あいつは、なにも知らない。守つて、やつてくれ…俺の代わりに、頼む、お前しか、望みは…」

「分かつた、分かつたからもう、なにも言つな」
きつく抱き締める瑪瑙の頬に、柘榴の手が、そつと触れてきて撫でた。

「す、まない…迷惑、かけ…て」

「なに言つてるんだよ、バカ野郎が！しつかりじろつてんだけ」

「そ…う、だね」

叱咤する瑪瑙に、柘榴はうつすらと笑顔を作つた。

「一緒に、探しに行くんだろ？ そうだろ、柘榴」

彼が、また笑つたような気がして、瑪瑙は強く、柘榴を搖さぶつた。

「おい？俺…やっぱ一人じゃ無理だ、起きろよ、柘榴、起きてくれ、なあ？」

揺さぶるが、彼は頼りなく、たわむだけ。

柘榴は微笑んだまま、一人、大気に還つていった。
「分かつた…その約束、必ず守るから。だから、そこで見ていく
れ、柘榴」

「氷魚、氷魚？ おい、ちゃんと聞いてたのか？」

話し終えた瑪瑙は、俯いたままの氷魚を覗きこんで、面食らつた。

「うおつ！？ なつ、泣いてる！」

数歩、後じさる瑪瑙。

彼は、何より苦手なのは女の涙である（別に、たらしではないのだが…）。

「だつて、だつてさ！ 泣くしかできないじゃないの？」

さらに泣きじやぐる氷魚に、瑪瑙は頭を抱える。

「あーもう、と、とりあえず落ちつけ、な？」

「ねえ、瑪瑙、アンタなの？」

氷魚は、涙の溜まつた瞳を、何度もしばたかせた。

どうやら瑪瑙も、慌ただしい彼女の仕種にすぐ、状況を察したよう
で、諦めたように、深い溜息をついた。

「あ、戻つちまつたのか。元の姿つて、キライなんだよ
なあ」

わずかに口を尖らせて、ぶつぶつ言う彼に、氷魚は、きょとんと首
を傾げた。

「なんで？ 別に、なんともないよ？ 不細工ってわけでもないし」

「でもないけど、俺はヤ～なの！」

「あつそ…で、なに？ 話さなきやいけない事つて」

氷魚は、コンプレックスがどうの、といつている彼を無視して、や
つと本題を引つ張り出すことに成功した。

「立ち直り早いな、お前…まあいい、よく聞け。俺たちは狙われて
る、危険な旅になるつて事だ、以上」

「はー？ 旅つてなにさつ、どこ行くのよ！」

「行くつて、決まつてんだろ？俺たちの故郷だよ。全部死んだつ、
て訳じやないからな」

ばちん、と無邪気にウインクをした彼に、氷魚は、全身の血が引く
思いをした。

「はあ？ 嘘でしょ～…」

かくして、二人の危険（？）な旅が、幕を開けたのだった。

旅立ちの時（2）（後書き）

こんにちわ、維月です。『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。拙い話ながら、ここまで読んでくださる読者様、ありがとうございます。次回、またも氷魚は騒動の渦中へ。次回お楽しみに！

異界の風（前書き）

瑪瑙に連れられて潜つた、異界の入り口・水の門。
炎天下の熱に灼ける、どこまでも果てない、
広大な砂漠が広がっていた！？
タクル！

異界の風

「ねえ、ちょっとー聞いてる?」
「行くのよ?」

氷魚と瑪瑙は、氷魚の部屋を出て、砂利道を歩いていた。
辺りはもう、既に暗い。

「どこって、今説明したろ? よし、こいつでいいか」
瑪瑙は、橋の側に立つと、小声でなにかを唱え始めた。
ぴちゃん、と水が爆ぜる音^はがうつろに響く。

川は、月の光を受け、白銀の花びらを散らし、ほの青く輝きながら、
水面に門を浮かび上がらせた。

門、といつても、決して石造りの物ではない。
水そのものが、門の形を取っているのだ。

「うつわあ……なに、これ?」

氷魚は、田を剥いた。

橋の上から身を乗り出して、川面をのぞく。

「出口を開いた、水を媒介にしてな。こいよ、氷魚」
そう言ってから、なんと瑪瑙は、橋から飛び降りたのだ。

氷魚は、慌てて橋の下をのぞいた。

この橋は高く、川も大きくて深い。
しかし、水にぶつかる衝撃音がないとこりをみると、平氣のようだ
った。

「やだつ! 怖いしつ、この橋って、高いのよ……」

氷魚は、後じさる。

ダメなのだ、高い場所が……!

ぎゅつ、と目を閉じて、欄干にしがみつく氷魚の傍で、瑪瑙の呆れ
たような、深い溜息がした。

「やれやれ、しょうがねーなあ」

瑪瑙は、一蹴りで橋の上にいる氷魚の傍に着地すると、やにわに氷
魚を抱き上げた。

「んなつーちよつと、離しなさいよつ…バカ、変態つ」

急に抱き上げられ、頭に血が上った氷魚は、瑪瑙の腕の中で、じたばたと暴れる。

「つたく、ちりとは落ちつけ…早くしねえと門が閉じちまうだらうが！」

なぜか、真剣な紫陽花色の瞳に見つめられて、氷魚は決まり悪そうに、ふいっ、と視線を逸らした。

「も いやつ！」

「はいはい、通るぞ～」

まだ僅かに暴れる氷魚を抱き込んで、瑪瑙は、再び橋から跳んだ。高く、虚ろな水音が響いて、止まっていた時間に色彩が戻る。しかし。

そこにはもう、水の門も、一人の姿もなくなっていた。

「ん、う…？」

温かい。

心臓の音が、心地よい…。

誰の、だつただろうか？

長時間を揺られて、うとうとしていた氷魚は、頬に温もりを感じて目を覚ました。

「お、目覚めたか。いま丁度、着いたところだ」

氷魚は、目を見張った。

「なつ、な、なによここは

！？」

砂漠、だつた。

二人の前には、どこまでも、広大な砂漠が広がっていた。

「見りや分かんだろ～？砂漠だよ、さ・ば・く」

瑪瑙は、抱いていた氷魚を、砂の上に降ろす。

「まさか…いまから砂漠渡るなんて、言わないよねえ？」

皮肉たっぷりに言つてやつたつもりだが、瑪瑙は真顔で、「そうだ」と返してきた。

「ああ、もう…殴つてやりたい」

氷魚は、がっくりと項垂れた。

目の前に広がるのは、炎天下の熱に灼けた、広大な砂漠だ。

(なんの準備もなくて、こんなとこ、進めるわけないじゃない！)

内心、氷魚はひどく毒づいた。

確かに、氷魚の服装は、およそ砂漠に向いたものではなかつた。タンクトップに、膝丈より短いスカート、そして、履き古したスニーカー。

「ほれ、これ被つてな…日よけだ」

キンキン、とうるさい氷魚の頭に、白い布がかぶせられる。

瑪瑙は、自分の被つていた、少しうす茶けた外套マントを投げてよこしたのだった。

「…あ、ありがとう」

「いいよ、別に。平氣なら行くぞ？」

小さく返事をした彼女に、素つ気なく言つと、瑪瑙は背中を向けた。

「ねえ、そういう瑪瑙は…なにも被つてなくても平氣なの？」

ちょこちょこと小走りに走つて、瑪瑙の隣に並んだ氷魚は、遠慮がちに問い合わせてみる。

「あ？俺はいいんだよ、慣れてる」

「そ、そなんだ…ホントに？」

(な、なんか…さつきと雰囲気ちがわない?)

「ああ…」

しばらく、両者の間に、音のない時間が流れた。

それを始めに破つたのは氷魚だった。

「ねえ、これから行く所つて、ここからどのくらいなの？近い？」

「近い、ことになるかな。3ヶ月くらいで着くぞ」

「もう驚かないわよ…そつ、3ヶ月ね。それで…その間つてやつぱり」

「野宿になるな」

きつぱりと言つた彼に、氷魚はまた項垂れる。

「食べ物とか、どうするの？」

「まあ、なんとかするさ…心配いらねえよ
「なにそれえ～…」

砂漠の、寒暖の温度差は激しく、夜の冷え込みは厳しい。

夜。

二人は、焚き火の傍で野営していた。

「さつ、寒い…冬みたい、ううん、それよか寒い」

何度もくしゃみをして、縮まる氷魚の頭を、瑪瑙は撫でてやる。

「冬は、これよりもっと厳しいぜ？一定の、動植物しか生きられない

くなるんだ」

「一定の動物つて、それ以外がいるの？」

「ああ、家畜とかだ、それ以外は、たぶん死ぬか冬眠するな」

「ふうん。ふああ…」

氷魚は、欠伸をかみ殺す。

「眠いか？」

「うん…」

目を擦る氷魚の横顔に、なぜかドキッ、とした瑪瑙は、ポリポリと頬を搔き、慌てて顔を逸らした。

今の自分は、多分、とんでもなく真っ赤になっているだろ？から。

「氷魚、その…なんだ、悪かつたな、急展開ばっかりで。疲れたよ

な？だから…少し、休め

「うん、じゃあ…少し寝るね？」

氷魚は、炉端に伏せると、ほぼ同じに眠つていた。

「もう寝てらあ…疲れたよな、ごめんな」

囁くように囁いて、瑪瑙はずつと、安らかに眠る、氷魚を見ていた。

追手（前書き）

いつも、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。
一緒に旅をするうち、ほのかに惹かれ合つ氷魚と瑪瑙。
うーむ、この恋… 実るか？

追っ手

夜明け前、まだ空も白まない「うち」。

二人は、早々に夜营地を去つた。

砂漠の寒暖の差 特に、深夜から夜明け頃の冷えこみは厳しい。

冷えこみは厳しいが、夜明けの移動は、日中に砂漠を渡るよりはいくらかマシで、より広範囲に渡つての移動が可能なのだ。

「瑪瑙…待つて、きや！」

なにもない砂地 　　だと思つていたが、氷魚はなにかに躡いた。^{つまさ}

「なんだよ、その格好」

ぱふんと、砂埃を舞わせて転んだ氷魚を、瑪瑙は笑う。

「躡いたのよ…見れば分かるじゃない、やなヒトねつ」

決まり悪そうにして、氷魚はふいつと明後田の方向を向いてしまつた。

「ああ、『めんつて…ほら、手え貸せ』

瑪瑙は、まだくつくつと笑いながら、氷魚に手を差しだした。

「ありがと…もう、砂だけ〜」

文句を言いながら、砂を払い落とす氷魚。

そんな彼女を、瑪瑙は目を細めて見つめていた。

氷魚はそれに気づいたふうもなく、依然、砂がビリビリと文句を言つてゐる。

砂漠を渡つて 　　もうすでに2ヶ月半が過ぎていた。

「ねえ瑪瑙、なんだつたんだろ？」

氷魚は、躡いた場所をもう一度振り返つてみると、やつぱりなにも見当たらない。

「躡いただけだろ？ ホレ行くぞ」

「うつ…うん」

(なーんか、おかしい… 究然としないなあ)

氷魚が、瑪瑙を追つて背中を向けたそのあと、すぐに、彼女からそう離れない砂地が沸くように盛り上がり、鋭利な爪を持つなかが突き出される。

それは丁度、蜘蛛のような、節足動物の脚に、ひどく似ていた。突き出された脚は、周囲の砂を大きく搔くと、再び砂の中へと沈み、それが通つた後には、巨大な穴だけが残された。

追跡者は、氷魚に狙いを定めたのだ。

地中深くに潜り、力を蓄えながら、獲物が弱る瞬間を待つている。

（こる……やつぱり、なにかがいる！？）これは、危険だつ

氷魚の中で、警鐘が鳴る。

耳の奥で、血汐が逆流する音を、氷魚は聞いた気がした。

「…お、氷魚、どうしたつ？」

「あっ、な…なに？」

振りむくと、怪訝な顔をした瑪瑙が、不機嫌そうに腰に手を当てる立っていた。

どうやら、話しかけられていたのに、気づかなかつたらしい。

「なした…青い顔して、少し休むか？」

瑪瑙が、自分を心配してくれた。

そう思つと、なぜか頬が熱くなる氷魚だったが、今はそれどころではない。

「ううん、平氣だよ…先を急ごう」

「ふーん、珍しいなあ…お前が急ごうだなんて」

ニヤニヤと笑う瑪瑙に、笑いかえすのがやつとだ。

顔が、強張る。

多分、今すぐ変な顔をしたと思つ。

「そう？ たまにはね」

「そつか」

叫びそうになるのを必死で飲み込んで、氷魚は笑つた。

底知れぬ殺意に、氷魚はただ、青ざめることしかできなかつた。

すでに陽は高く、砂丘の向こうには、ゴリゴリと陽炎が立ち上っている。

汗を拭うことも忘れ、氷魚は、ひたすら足を進めた。

「お前！やつぱり具合悪いんだろ？なんで、なに言わねえんだつ」ついに見かねた瑪瑙が、氷魚の腕を強く引き寄せて怒鳴った。

「平氣、平氣だったら…早く行こ！」

じたばたと、振りほどこうとする氷魚の腕を、瑪瑙はさらに強く握りしめる。

「んな青い顔して！なにが平氣なんだよ、どうしたんだ？」

瑪瑙は、荒げていた声をなるべく和らげて、心底心配げな瞳で氷魚を覗きこんだ。

「瑪瑙…あたし、なんかに狙われてるみたい、止まっちゃダメなの、掴まっちゃうよお！」

「なんだって！？誰にだよつ」

瑪瑙にとって、氷魚に悪意を持つて近づく者は、敵と同義にみなされるのだ。

「分かんないよ、でも分かるの！」

瑪瑙は、ガタガタと打ち震える氷魚を、優しく抱き締めてやる。

「大丈夫だ、俺がいる…暑さで幻覚でも見たんだよ」

とにかく、少し休もうと言いかけた瑪瑙は、とんでもない異変に気がついた。

氷魚の、足元の砂が不自然に盛り上がり、様子を伺うよつて、尖った爪を持つ脚が蠢いていたのだ。

「やつ、なに！？」

しがみついていた氷魚が、さらにきつく瑪瑙の胸板にしがみつく。

「いい子だ、氷魚…このまま俺の傍から離れんな？」

「瑪瑙う」

「俺としたことが、油断したな…伏兵か！」

氷魚は、戦いた。

耳の奥で、鼓動がうるさい。

その音は、逆巻く潮騒の音と、ひどく似ていた。

砂が流れ始めてすぐ、それは姿を現す。

ギチギチと、耳障りな金属音と共に現れたのは、巨大な蟻地獄だった。

氷魚は、ヒツと喉の奥を鳴らして、一歩後じさる。

「なあに、大した奴じゃねえよ…心配するな

なにを考えているのだ、この男は！？

こんな巨大で、気味の悪い相手に、勝つ気満々である。

「無理ッ！無理よつ、あんなにでつかいんだもの、一人じゃ…どつ、
どうしようつ！」

妙に、自信ありげな瑪瑙の腕に、氷魚はきつく抱きついた。

「心配ねえ、信じろ！」

その先を言おうとした氷魚を、瑪瑙はきっぱりと遮った。

瑪瑙はいつの間にか、腰の長剣を抜きはなっていた。

氷魚は、それにひどく面食らつ。

（刀！？瑪瑙、そんなもの持つてたなんて…全然気づかなかつたつ）
「お前つ、『一連』（にれん）を知らないわけねえよなあ？」

そう言って、瑪瑙は獲物に鋭く切つ先を向ける。

一連、といつ名を聞いて動きを止めた敵に、瑪瑙は心底おもしろそうにニヤリとした。

（一連つて、なんだろ？ そうじやなくてつ、もしかしてあの化け物、
瑪瑙を怖がつてるの！？）

氷魚は震えながらも、対峙する瑪瑙と蟻地獄を、穴が開くほどに見つめる。

「正確にや、もう一連じやねえけどなつ、俺に出会つたのが、運の
尽きだつ」

刀を振りかぶつた瑪瑙に、蟻地獄は勢いよく後退して砂に潜り、完全に姿を隠してしまつ。

どうやら、形勢不利を悟つたようだ。

「ち……つ、潜りやがった！」

瑪瑙はきょろきょろと、あたりを注意深く見まわしながら毒づいた。

「瑪瑙！あいつは……」

「来るな！」

びくっと、その場で氷魚が立ち止まる。

走りだそうとした氷魚を、瑪瑙は止めた。

「あつ」

「怒鳴つてスマン、まだ動くんじゃねえ……両方の触角を切つたが、油断は禁物だ」

「い、こあい（怖い）……」

氷魚は、傍に寄ってきた瑪瑙に抱きつぐ。

きょろきょろと、警戒しながら見まわしていた氷魚の足を、砂の中から伸ばされた脚が掴み、硬く砂地に縫いつけた。

「やだつ、やだ、足がつ！」

その時、瑪瑙は不謹慎にも、胸板に押しつけられている氷魚の豊満な二つの膨らみに、意識を集中していた。

「つたく、諦めの悪い！出てこい！」

瑪瑙は、氷魚からそう離れていない砂地に、刀を突き立てる。

氷魚の足を掴んでいた爪は、短い悲鳴と共に、勢いよく足を放して砂の中に引っ込んだ。

ぼこぼこと、砂底で蠢く感じが、足の下にも伝わってくる。

「瑪瑙、来るわ！」

「翔ぶー！しつかり掴まれ、放すなよ？」

「うん！」

瑪瑙が刀を引き抜いて、跳び上ると同時に、砂地が爆発して、苦しみ悶える蟻地獄が姿をさらした。

未練がましく、脚は砂を掻いていたが、それはすぐに動かなくなつた。

「あの……『めんね？瑪瑙』

サクサクと、早足で先を行く瑪瑙の背中に、氷魚は申し訳なさそうに謝った。

「なにがだ？」

ふり返らずに、瑪瑙が尋ねてくる。

「だって、その…嘘、ついたから。迷惑もかけちゃって」

「んなわけあるか…」

「え？」

そっけなくぼそりと言つた瑪瑙に、首を傾げる氷魚。

「だーから…別に、謝んなくていいんだよ」

「ありがと、瑪瑙」

「…おうよ」

瑪瑙の腕に思いきり抱きついて、氷魚は嬉しさに顔を赤らめた。
照れ屋な瑪瑙は、たとえ嬉しくても、表情を変えない。
いや、変えないと思つてているのは、彼だけかも知れない。
げんに、瑪瑙の顔も、氷魚に負けないくらいに真っ赤だった。

一人の旅は、まだ始まつたばかり。

今日も、故郷を目指して旅は続く。

追手（後書き）

いつも、維月です。

ここまで読んでくださった読者さま方、ごくごくまで。氷魚と瑪瑙の行く先、どんどん困難が立ちはだかります。

こんな話でよろしければ、どうか読んでやってください。

恋（前書き）

『』でもいる、『』く普通の高校生だった氷魚は、ある日『迎えにきた』と言つて田の前に現れた少年・瑪瑙と一緒に、異界への門を潜つてしまつ。

瑪瑙の故郷を目指して、旅をする一人。
なにやら、親密な関係になりつつあって……？
異界を舞台に繰り広げられる、ラブファンタジー

恋

始めは固く、とげとげしかった氷魚も、今ではすっかり瑪瑙とうち解け気安くなつていた。

瑪瑙も、（いや、かなり）氷魚に興味を持つていた。

「くしゅんっ！？」

ぴん、と張つた夜の静寂を、氷魚のくしゃみが破つた。

「ん、カゼか？」

勢いをつけて干し肉を噛み切つてから、瑪瑙が聞く。

「う～ん、そうかもしない」

「熱、ないか？平氣か？」

じつと見つめてくる瑪瑙に、氷魚はポッと顔を赤らめた。

瑪瑙が、心配してくれている！

そう思つと、頬が熱くなるのだ。

「うん、熱は…ないかな」

額に手を宛ててみて、照れ隠しに氷魚は笑つて見せた。

「俺のやつ、貸してやるよ…そうすれば、少しさは暖まる」

瑪瑙は、自分が着ている外套マントを脱いで、そつと氷魚の肩に掛けてやる。

「わあ、ぬくい…ありがと～、あつ、でもアンタが寒くなつちゃう！」

慌てて、外套を返してきた氷魚に、瑪瑙は柔らかく笑つた。

「なんの、平氣だ…これくらい」

「ホント？ホントに平氣？」

しゅんと、心なしか頃垂れた氷魚の頭を、瑪瑙はクシャクシャとかき混ぜてやる。

「ああ」

一人の間に、しばしの静寂が流れた。

「…氷魚」

始めに、静寂を破ったのは瑪瑙だった。

「なあに？」

うとうとしていた氷魚は、ふにゃ？と眠そうな顔を瑪瑙に向ける。

「お、俺さ…あのな、あの…ああくそつ！つまく言えねえよつ」

いきなり、うわーっと頭を抱えた瑪瑙を、氷魚は慌てて覗きこんだ。

「ちょ、ちょっと…瑪瑙？あんたこそ熱あるんじゃない、顔真っ

赤よ？」

「…いや、大丈夫だ」

ふらりと半歩、氷魚から離れる瑪瑙。

「ちつとも、平気って顔してないじゃない」

やつぱり風邪ひいたんだわ、と外套を持つて近づいた氷魚を、瑪瑙はきつく抱き締めた。

突然のことにより、氷魚は、瑪瑙の腕の中で身を固くする。

「瑪…瑙…？」

「ううすれば…もつと温かい」

瑪瑙と、氷魚の一いつの鼓動が、次第に同調し、溶け合っていく。

顔から火が出るとは、まさにこの事だ。

顔が、こんなにも熱いのは、なぜだろつか？

「違う、違うんだ…そんなことが言いたいんじゃねえ、俺、氷魚が好きだよ」

「め、瑪瑙…」

視線が、想いが絡まる。

氷魚はふと、異界 人間界で生活していた時を思い出した。

（そう言えば…向こうにいた頃、こんないいムードになつたこと…なかつたんだよね）

「お前さえよければ…夜明けまで、このままでいてやる」

うとうと田を細めた氷魚に、瑪瑙は優しく囁いた。

「うん…ねえ、瑪瑙？あたしの兄さんって、どんなヒトだったの？見あげる氷魚の青い瞳は、好奇心の目。」

「そうだな……お人好しで、まじめで、俺と違つて……器量よしかな
二人は抱き合つたまま、いつの間にか白い砂の上に座つていた。

「前にも言つたけど、アンタも……充分男前だよ？」

戸惑いがちに言つた氷魚の顔は、うつすらと赤い。

「そう……なのか？」

「まーねえ……あたしの周りに、瑪瑙みたいなヒト……いなかつたし」
そう言つて、氷魚はゆっくりと目を閉じた。

「どうした、眠いのか？」

瑪瑙は、抱き締めていた腕を緩めて聞く。

「ううん……このままでいて？温かくて、すゞく落ちつく。心臓の音
が、一つになつたみたいで」

幸せそうに、氷魚が頬を寄せた瞬間。

その時、うす水色の地平に、一条の光が走る。

夜明けだ。

また、一日が始まるのだ。

砂漠越えの、厳しい旅が。

「さあて、そろそろ動きだすか」

瑪瑙は、氷魚を抱いていた腕を放すと、グッと縦に伸びをした。

「あ、瑪瑙……これ、返すね？ありがと」

氷魚が、外套を差しだした瞬間……。

「な……につ」

砂の上に、ぱさりと外套が落ちる。

氷魚は引き寄せられると同時に、唇に、温かな感触を感じて、目を見開いた。

瑪瑙の顔が、すぐ目の前にある、唇を奪われたのだ。

「なつ……瑪瑙？ちょっと、苦しいつてば！」

予想はしていたが、突然のことに、氷魚は目を白黒させる。

「……りたい、氷魚、お前を守りたい！」

『守つてやる』ではなく、『守りたい』

見つめ返した瑪瑙の顔は、もう赤くなかった。

「なんか、恥ずかしいけど…嬉しい」

「氷魚、もう一回していか?」

「やつ、やだ、なに言いだすのよ!」

再び、強く抱き締められて慌てた氷魚は、腕の中でじたばたと暴れる。

「いひつ！ いひつ、ま、いいか：一回できたしvvv」

「もひつ、調子乗るんじやないつ」

ぴょんぴょんと、逃げまわる瑪瑙を追いかけて、氷魚は叫んだ。

「氷魚」

「なによつ、まだ何かする氣?」

しゃーっと、構えた氷魚に、瑪瑙は苦笑せざるをえない。完全に誤解されてしまったようだ。

「違ひつて、あれー見てみろよ」

瑪瑙は、現在地から、そつ遠くない地面を指さしていた。

「あ…そこつ、色が違つてる！ 砂漠が切れてるんだつ」

「行くぞ、氷魚！」

「うんつ」

二人は軽快に走り出す。

砂漠の暑さもじこへやら。

砂漠を抜けて踏んだ地面は、苦と、丈の短い下草が生い茂っていた。

「こりや…防風林みてえだな」

「わ、足元がふかふかしてる～」

進むにつれ、細かつた道は太く、整備されたものに変わっていく。

「あ、車輪の跡！」

氷魚は屈んで、轍の土の欠片をつまみあげた。

「衙まちだ、行こう氷魚…ここがどこだか、確かめねえと」

「…あつ、待つてよ瑪瑙つてば～」

ぼつつとしていた氷魚は、慌てて瑪瑙の背中についていった。

恋（後書き）

こんには、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。

やつと砂漠越えを終えた一人ですが…お疲れ様でした。（笑）
現実世界も、かなり気温が高く、室温が29 近くあります。

お暑い中、読んでくださった読者様に感謝です。

どなた様も、お体に気をつけて、つつがなくお過ごしくださいます。
よう、読者様、並びに作家様方に、暑中見舞い申し上げます。
それでは、失礼致します。

氷魚、迷子！？（前書き）

無事に、砂漠を越えた瑪瑙と氷魚。

2人はその先の衙まち・呂山ろせんでしばしの休憩を取つた。

しかし、瑪瑙が目を離した隙に、氷魚が迷子になつてしまつ！

痴漢に遭つていたらしい氷魚を、裏路地で見つけた瑪瑙は、激しい

嫉妬に駆られる。

氷魚、迷子！？

「ねつ、ねえ… いのまち衙から、瑪瑙の村までつてどねぐらいなの？」

氷魚は、とことじと足早に、瑪瑙の背中を追いながら話しかけた。背の高い瑪瑙と、小柄な氷魚の歩幅には、やはり誤差がある。つまり簡単に言えば、単に瑪瑙の歩くペースが速いだけなのだ。

（瑪瑙、待つてつてば…歩くの、早いわよつ）

氷魚の哀願がやつと通じたのか、瑪瑙は、ゼーゼーと荒く喘ぐ氷魚を振りむいた。

「そうだな… いのまち山やまから、歩いて一日へりこか」

「…山やま、変わった名前ね」

少し落ちついた氷魚は、きょろきょろと、興味深そうに周りを見ながら言った。

いま2人は、衙の大通りの脇に立っている。

衙は、どちらかといつと中華風で、いつか、テレビで見た中国の市場を思わせた。

「すごいのね、色んな店が出てる…なんかお祭りみたいね？」

きやつきやと嬉しそうな氷魚に、瑪瑙は、ひょいと片眉を上げる。

「じゃあ、少し見ていくか？」

「ほんと…？」

ぱあっ！と華やいだ氷魚に、ほんと咳払いをしてから、瑪瑙はさら付け加えた。

「いつまでも…その格好じや過げしにくらいだろ？夜は特に」言つてから、瑪瑙は照れ隠しに、ふいと背を向ける。

（へえ…ちゃんと、細かいところまで見てるんだなあ）

そんな瑪瑙を、氷魚は嬉しそうに、はにかみながら見つめていた。

「いじんとこ、ずっと厳しかったからな。息抜き…だ」

全部言い終えたとき、隣にいたはずの氷魚が…どこかに消えていた！

「なつ、氷魚！？あいつにしたら、なんか大人しいと思つたんだよ
つ」

(じゃあ、さつさと氣づけよ…)
ぬあ～つと、ひとりきり頭を抱えてから、瑪瑙は人混みの中を縫う
ように進み、走り出す。

その頃氷魚は、人の波に流されるがままに進まされて、やつとの
事で、その流れから脱出したところだった。
うざつたい、人混みを抜けたのまではいい。
独りぼっちだ…。

「マズイ、よね？これ、絶対迷子…だ」
そのとおりだつた。

相変わらず、人通りは激しい。

氷魚はその中に田を走らせて、おろおろと瑪瑙を探すが、見つか
ない。

どうしよう…どうしよう。

瑪瑙、怒つてるだらうな、それはもう鬼のようだ…。

怒つている瑪瑙を思い浮かべて、氷魚はサーッと青くなる。

『迷子の時は、動かないのが一番』と俗に言つが、氷魚にはそれが、
今自分の為になるような、大した意味を持つてゐるとは思えなか
つた。

短絡に考えた末に、氷魚は再び人混みの中に紛れていった。

(動いていれば、瑪瑙と会えるかも知れない！)

同時、瑪瑙も、氷魚を探しまわつていた。

(くつそお…俺としたことが！もつと気を張るべきだつた)

「チツ、ここにもいねえかつ」

瑪瑙は屋根に飛び上ると、再び走り出す。

高い場所からだつたら、もっと見つけ易いかも知れないからだ。

「裏路地か……なんか、やゝな雰囲気だなあ。早く引き返せな……やめ
つ！」

「つと…氣いつけるやボケつ」

「「」、「こめんなさいつ」

いたた、と腰をさすりながら、氷魚は涙目で相手を睨んだ。
角でぶつかったのは、茶髪の若者だった。

年の頃は、瑪瑙と大して変わらないように見える。

内心、氷魚は『お前こそ、氣をつけやがれ！』とひどく毒づいた。

「おじつ」

行こうとした氷魚の腕を、男は強く握る。

「なつ、なによ…ちょっとやだ、放してよ！放せつ」

腕を掴まれ、じたばたと暴れる氷魚に、男は下心丸出しの、いやら
しい笑いを浮かべた。

「「」がどこだか、分かつてるんだろう？それとも…迷子か？」

「「」がどこだか、分かつてるんだろう？それとも…迷子か？」

「おつと…氣イ強えなあ、氣の強い女は好きだぜ？大人しく、こつ
ちこじよ」

勢いよく引き寄せられて、氷魚は慌てて顔を逸らした。

「いやだつてばつ！ちょっと、こり、やめろ！」

（ぎやうつ、息クサイつ！しかも…不つ細工なツラ近づけんなよつ）
氷魚は、必死に堪えていたが、ついに堪忍袋の緒が、ぶちり…と思
いきり切れた。

「や…めろつて言つてんだろうが、この下種野郎げす！」

氷魚の雄叫び（？）と、その後に、なにかを殴打する音が裏路地に
響いた。

「いた！氷魚、なんで裏なんかにつ！」

2、3軒屋根を飛び越えてから着地すると、瑪瑙は走りだす。

角を曲がって裏路地に入ると、血眼で探していた氷魚が、脱いだ靴を片手に佇んでいた。

「氷魚つ、氷魚

「..」

「あ、瑪瑙！」

あまりの緊張感のなさで、瑪瑙は一瞬、がっくりと肩を落とす。

「あ、じゃねえ！さんざん探したんだぞつ、大丈夫か！？なにも、されなかつたかつ？」

瑪瑙は、氷魚の双肩に手をあてがつて、ガクガクと揺らした。

「見てのとおりよ、酔つぱらいに絡まれちゃつてね…靴で殴つてやつたから、心配なく」

氷魚が、つま先で示した先には、ぐつたりと男が伸びている。

瑪瑙は、ギロリと伸びている酔つぱらいを睨んだ。

この酔つぱらいが…俺の氷魚に、あんな事や、そんなことを…（怒）

瑪瑙の中に、めらめらと嫉妬ともつかぬモノが燃え上がった。

「行くぞつーこんなとこ、長居したくもねえつ」

「うつ、うん！」

氷魚の手を掴んで、強く抱き寄せるよつてから、瑪瑙は、歩調荒く裏路地を出て行つた。

氷魚、迷子！？（後書き）

どうも、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けに参りました。
氷魚と瑪瑙、ジワジワと仲が深まっていますね。（笑）
きつと次には…

ご期待くださいませね。

それでは、失礼致します。

落花流水 愛は、荒野に咲く（前書き）

「」く普通の高校生だった氷魚は、ある日、突然現れた瑪瑙に連れられて、異界の門を潜つてしまつた！

旅を続けるウチに、互いに惹かれ合う氷魚と瑪瑙。

呂山の衙での騒動をきっかけに、互いが必要であることに気づき、

瑪瑙が氷魚にプロポーズ。

そしてついに…惹かれ合つ2人は結ばれた。

落花流水 愛は、荒野に咲く

大通りへ向かつて歩きながら、瑪瑙はさりげなく、氷魚と手を繋いだ。

「あつ」

さつと一瞬、氷魚の顔が赤くなつた。

ドクンドクンと、やけに心臓の音がうるさい。

氷魚は、ギュッときつく目をつぶつてから、瑪瑙の方を振り向いた。

「始めから、こうしどけばよかつたな」

目元を和ませて、瑪瑙は笑う。

心底すまなそうに謝る瑪瑙に、氷魚は思いきり笑い返した。

「へんなの、あたしが勝手に迷子になつたんだよ？」瑪瑙が謝ることないつて、もうその話は終わりねー

ぽかんと、一瞬惚けた瑪瑙は、ありがとうと笑つて、氷魚の髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜたのだった。

彼女は強い。一人で痴漢に立ち向かつたとはいえ、怖かっただろうに。

不本意のこととしても、彼女を一人きりにしてしまつた自分が、ひどく恨めしい。

「ねえ瑪瑙、あれ見てよつ、なんか売つてるー」

氷魚が指さした先には、一軒の露店商らしき屋台があつた。

黄昏の光を受けて、店先でキラキラと輝く宝石達は、見る者の目を楽しませる。

あまり、物に頓着しない自分でさえも、それらが美しいと思つのだ、氷魚がはしゃぐのも無理はないだろう。

「露店だな、工芸品や首飾りなんかを売つてるんだ」

「ああ、祭りの出店みたいなものね」

そわそわとする氷魚に、気づかれないと、瑪瑙は忍び笑いをした。やはり若い娘なのだな、と。

「見ていくか？」

「えつ、いいの？嬉しいつ」

満面の笑顔を咲かせて、氷魚は繋いだ手を強く握りなおす。

今度は、瑪瑙が赤面する方だった。

二人が露店に近づいていくと、途端に威勢のよい声が迎えた。

「いらっしゃい！おや、兄妹揃って、仲がいいねえ」

迎えてくれたのは、大分年かさの女性だった。

「おばちゃん……俺たち、そんなに兄妹に見えるか？」

思ひきり渋面を作つて、むくれる瑪瑙。

恋人同士のつもりでいたのに、兄妹と間違われるなんて非道すぎる。

「め、瑪瑙……そんなつもりで言つたんじゃないつてば」

機嫌を損ねた瑪瑙を、氷魚は慌ててなだめた。

「おつとど、そりや失礼だつたね。恋人さんだつたかい」

「え……そのつ」

氷魚が恥ずかしそうに身じろいだが、そんなことは構わずに、瑪瑙は続けた。

「ああ」

「どうか、なにをお探し？」「うんと安くしてあげるよ」片目を閉じてウインクし、氣のいい女店主は快活に笑つ。

「氷魚、なにか欲しいモンは……」

そう言いかけてすぐ横を振りむいた瑪瑙は、はしゃぎまくる氷魚とぶつかつた。

「ねえねえつ、これ似合つ？どお？」

ウルウルと、目を潤ませて聞いてくる氷魚に、瑪瑙はかなり面食らつた。

氷魚は、鮮やかな緑色の石その物がついた、耳^{ピアス}をつけてはしゃぐ。「どれどれ、お嬢さん……ふむ、いいんじやないか、髪の赤に映えてよく似合つてる

「ホント？似合つてるつて……ねえ瑪瑙、嬉しいよお

「よしよし、よかつたな

あれもこれも、と田代移りしている氷魚を横田で見ながら、瑪瑙は女性店主に小声で話しかけた。

「さつきのヤツ……頼めるか?」

「あいよ、まいどあり。見たところ、勝負時みたいだね……一番いいのを選んだから、頑張るんだよ?」

「おう、さんきゅ

「ねーえ、瑪瑙つ！次行こうよ次いつ」

背中にどついてきた氷魚に、瑪瑙は慌てて、小さな包みを懷に隠した。

「なんだ、もういいのか?」

「うんつ、ねーえ次つ」

どうやら、気づかれていないうだ。

べつたりと懷いてくる氷魚に、瑪瑙は密かに、安堵の溜息をついたのだった。

「おばちゃん、俺たちそろそろ行くな?」

「まいどあり、頑張りなよー?」

快活に笑いながら見送る彼女に、瑪瑙はぺこりと頭を下げた。

「瑪瑙?」

氷魚は、なんの話だらうかと思つたが、そこは聞かないことにしておいた。

辺りはすっかり暮れなずみ、月が仄青く、辺りを照らす。

二人は街まちを離れて、月がほんのりと照らす広野を歩いていた。

「氷魚、疲れてないか?」

瑪瑙は立ち止まって、氷魚に振りむいた。

「平気だよ? あたしは大丈夫」

もくもくと歩き続ける彼女に、瑪瑙の眉間に、渓谷なみに深い皺が刻まれる。

「嘘つけ、お前はいつも我慢するんだ……ほら、座つてろ」

「平氣だつてば、ンヤつ」

少し強引に氷魚を座らせてから、瑪瑙は、深い溜息をついた。

「あんまり我慢するなよ、な？氷魚」

ポフポフと、頭を撫でて瑪瑙は笑う。ほんの少しだけ、悲しそう。

「……ごめん」

「なんてな、いいんだよ別に……謝るな」

しゅんと頃垂れた氷魚に、瑪瑙はにべもなく言つた。

「え？」

ぱちくりと瞠目した氷魚に、瑪瑙はこつこつと笑つた。

「手えだしな、いいモンやるよ」

座り込んでいる、氷魚の手を引いて立たせてやつてから、瑪瑙はがさごそと懐を探る。

「なあに？へんな事じやないでしょーね、あんたなら、それもあり得るから」

ふん、とふんぞり返る氷魚に、瑪瑙はがつくりと肩を落とした。

「ちーがうつて、つたくよお……ちつとは信用しろよな？」

「冗談よ、冗談…なあに？」

「あつあつた……指環ゆびわじやねえのが残念だが、これ、受け取つてくれねえか？」

瑪瑙は、懐から小さな包みを取り出すと、そつと氷魚に差しだした。

「なあに、あたしに？開けても……いい？」

「ああ、見てくれ……きっとお前も気に入るよ」

「瑪瑙から、プレゼントなんて珍しいねー……なにかしら？」

包みを開いて出てきたのは、さつきの露店で氷魚が見ていたのと同じ、一対の翡翠の耳璫だった。

「瑪瑙、これっ」

氷魚はあまりの嬉しさに、目を輝かせた。

「済まないな、氷魚。ホントは指環と思つたんだが……俺の有り金じゃ、こんくらいしか買ってやれなかつた」

すまなそうに言つて、ポリポリと頭を搔く瑪瑙。

そんな彼に、氷魚は思いつきり頭を振った。

「そつ、そんなことないよ！あたし、嬉しい」
声が、どんどん尻すぼみになつていぐ。
すでに、氷魚の顔は真っ赤だ。

照れて、はにかむ氷魚を、瑪瑙は強く抱き寄せた。

「く、苦しいよお……瑪瑙？」

「人間も同じだったよな？」

一瞬、なんのことだらうと瞠目してから、氷魚はさらに赤くなつた。
瑪瑙が、なにを言いたいのか分かつたからだ。

「これ、もしかして……プロポーズなの？」

「なあ氷魚、そばに……いて欲しいんだ。ダメか？」

真剣な、紫陽花色の瞳に見つめられて、氷魚は固まつてしまつ。

「そつ、そんな……ダメじゃ、ないよ」

「不幸な思いはさせねえ、だから……」

「……瑪瑙、あたしは……」

答えを待つ瑪瑙に、氷魚は柔らかく微笑みながら言った。

「ありがと、あたしでよければ、瑪瑙のお嫁さんにして……」

その先を、氷魚は言つことができなかつた。

狂喜した瑪瑙が、唇を奪つたからである。

その夜、満天の星空の下で、二人は一度と離れずに結ばれた。

「泣くな……なんで、泣く？」

氷魚の臉にキスして、そつと涙を拭つてやる。

「だつて……幸せ、なのよ、すげー」

「氷魚……愛してるつ」

「やあ……んつ、あつ」

まどろみながら幸せをかみしめ、氷魚は目を閉じた。

落花流水 愛は、荒野に咲く（後書き）

いつもこんばんわ、ご無沙汰しておりました維月です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けに参りました。

物語は、少し濡れ場が多すぎたかなあ？うーん（笑）

二人は、これで幸せにはさせませんよ、一筋縄ではいきません（苦笑）

ここまで読んでくださる読者様方には感謝です。

これからも、よろしければ謁見の程を。

それでは、失礼致します。

幻夢（前書き）

早瀬氷魚は、どこにでもいる「普通の高校生」。

ある日、氷魚は『迎えにきた』といつて目の前に現れた青年・瑪瑙に連れられて、異界の門を潜ってしまう。

砂漠を越え、ハプニング、アクションを交えた旅を続けるうちに、急速に惹かれ合い始める一人。

そして、ついに二人は結ばれ…故郷への旅は一時、終わりを告げる。

れいれい、れいれい。

水は流れる。

細く頬りない流れは、一つに集まり、やがて夜田にも青白く輝く泉となつた。

静かな波の中に、氷魚は漂つていた。

【氷魚……おいで、おいで。目を開けていらっしゃる?】

穏やかな青年の声が、そつと氷魚を誘つ。

「誰? あなた、誰……どうして、あたしを呼ぶの?」

氷魚は無意識に、その声に安らぎにも似た、懐かしさを思い出した。

「霧で、なにも見えないの……あなたは、这儿に?」

【おいで、いらっしゃる】

手が、差しされる。掴んだその手は、まるで少女のよつて白く、細かつた。

(白い手……女の、人?)

手を取ると同時に、立ちこめていた霧が溶けるように晴れていった。霧が晴れて、相手の顔が分かつた瞬間、氷魚は余りの驚きにきつくり息を詰めた。

「あなたっ! あつ、あたし? ひつん、男の人よね? でもそつくり

うろたえる氷魚に、彼は柔らかく微笑んでから、そつと手を離す。

【やつと会えたね……氷魚、俺は柘榴かくろ、君の兄だ。どうしても、伝えたいことがある】

「伝えたい、こと?」

氷魚の兄・柘榴は、ふいに端正な顔を、悲しみに歪ませた。

【君を……守つてやれなかつた、許してくれ】

「え……なんの、こと?」

【それが、いや……知らないなら、今はまだそのままでいい。できたら、命あるひきにお前に会いたかったよ】

そつと、頭を撫でる手がひどく愛おしくて、氷魚は奥歯を噛みしめて、口み上げる涙を必死で堪えた。

(...兄さん...)

【村を、頼む……瑪瑙と

三

「なに？ なんて言つてゐるのか分かんない！ ねえ兄さんつ
まるで、一時だけ引いていた潮が満ちるように、再び深い霧が立ち
こめ、すぐになにも見えず、聞こえなくなつた。

一 兄さん！
二 兄さん
三 ！？

「氷魚!? お前……何やつてんだよつ」

氷魚は、素つ頓狂な瑠璃の声に、ふと我に返った。

それも、一糸纏わぬ姿で。

硯が自分はここは水浴びに来たはずはないなかでたがたほんやりと空を見あげていると、突然彼女の意識は浮上した

その時、氷魚は改めて自分が一糸纏わぬ姿であるのに気がついた。

「きやあ
！ バカッ、変態えつち
！ こつちこないで

5

その後すぐに、ぱんつと、威勢のいい音が大気を揺るがせた。

慌てて、物陰でごそごそと服を着け始める氷魚。

瑪瑙は、鼻血を噴いてダウン中。

「つてえ……なに今更恥じらつてんだよ？」
いいからじつちつい

むぐりと起きあがつた瑪瑙は、軽々と氷魚を探い上^じげるど、そつと抱き締めた。

「どうした……どうか具合悪かったのか？　どうかしあまつたかと思つたぜ」

「……」

瑪瑙の腕の中で、なめらかな赤毛を撫でつけられながら、氷魚は大人しくしている。

「……声がしたの、ずっと、あたしを呼んでた」

「声？」

瑪瑙は、ん？と片眉を上げた。

「赤い髪の男の人が、あたしを呼ぶの……すこく懐かしくて、でも、彼の名前が、思い出せなくて」

その時、さつと瑪瑙の顔色が変わった。

「柘榴……柘榴だ！氷魚、他になにか言つてなかつたか？」

「ただずつと、謝つてた。『守れなくて、すまなかつた、村を頼む』つて」

「そうか、アイツらしい……死んでからもお人好しだよ、感謝してやんなきやだな。アイツが、俺たちを引き合わせたんだ」

「ええ…」

氷魚は、そんな兄を、心底誇らしく思つた。

彼がいなければ、瑪瑙とは会うことができなかつただろう。

「おつ、そろそろ見えてきたな……あの丘を2つ越えたら、俺たちの村だ」

「……ついに、着くのね？」

氷魚は、感慨深く言つた。

もうすぐ着くのだ、氷魚の故郷に。

人間としてではなく、彼女が本来、生きるべき世界に。

「ああ」

瑪瑙は一際強く、氷魚の肩を抱き締めたのだった。

幻夢（後書き）

いつも、維月です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。

うーん、どうだろう、この話は…余り面白くないだろ？

少し心配。

しかし、ここまで読んでくださっている読者様方には感謝感激です。

こんなでも宜しければ、読んでみてやってください。

それでは、失礼致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1188a/>

幻夢抄録 覚醒め

2010年10月10日03時43分発行